

「後ろのものを忘れる」 — 『フィリピ書』 3章13-14節の積義的研究 —

山 吉 智 久

Tomohisa YAMAYOSHI

目次

はじめに

1. フィリピの町とパウロ
2. 『フィリピ書』の概要
3. テキスト—翻訳と訳注
4. 文脈と構成
5. 競技の比喻
6. 「後」と「前」
おわりに

[Abstract]

“Forgetting Those Things Which are Behind”: An Exegesis on Phil 3:13-14

In his epistles, Paul sometimes uses a metaphor of ancient competitions, in particular, a *Stadion* (running race), to explain his ideas effectively and impressively. One of its most typical cases is Phil 3:13-14, which is to be interpreted as follows: to win the prize, a runner projects his body forward without being distracted by other competitors behind him. Such a competitive race will, however, inevitably create one winner and many other losers. If Paul himself becomes a winner, it implies that everyone else will be losers. The apostle here seems to be unaware of this essential problem of the competitionism.

はじめに

われわれが日本語で、現在を起点として時間的な位置(過去—未来)を言い表す際、ごく一般的には、空間的な用語である「前」や「後」を用いる。その場合、「過去」のことを表すのに「前」, 「未来」のことを言い表すのに「後」が当てられるのが普通である¹。

このような言語慣用を踏まえつつ、本稿が目指すのは、パウロがフィリピの信徒たちに対して書き送った『フィリピ書』3章13-14節の理解である²。その中でも特に注目するのは、13節に出る「後ろのもの」(τά ὀπίσω)と「前のもの」(οἱ ἔμπροσθεν)という表現である。ここでいう「後ろのもの」や「前のもの」

の」が意味するものは一体何なのか、これが本稿において解明しようと試みる主たる問題である。

1. フィリピの町とパウロ

『フィリピ書』は、その名が示すように、新約聖書に収録されているパウロによる書簡の中で、フィリピの信徒たちに向けて発信されたとされる手紙である。フィリピ(Φίλιπποι [Philippoi])は³、マケドニア東部の都市で、港町ネアポリスの北西20km、パンガイオン山の北東に広がる平野に位置する。アツピア街道と並ぶ古代ローマの街道の一つで、ビザンティオンからローマまでの全長約1,200km

キーワード：新約聖書, 『フィリピ書』, パウロ, スタディオン走

Keyword: New Testament, Epistle to the Philippians, Paul, *Stadion* (running race)

を石の舗装道路でつないだエグナティア街道 (via Egnatia) 沿いにある交通の要衝であった。

フィリピという町の名は、アレクサンドロス大王の父であるマケドニア王フィリポス 2 世にちなむ。この町はそもそも、近郊のタソス島の人々が、パンガイオン山で産出する金銀を採掘するために移住し、クレニデス (「泉の町」の意) という名の町を建設したことに端を発する。フィリポスはこの山に目を付け、自分の名前にちなんで町を改名、鉱山産業を振興した。ローマ時代の前 42 年、オクタウィアヌス (アウグストゥス) は、カエサルの暗殺者ブルータスとカッシウスの軍をこの付近の平原で破り、そこに多くの退役軍人を入れた。前 31 年、アクティウムの海戦においてアントニウスとクレオパトラの連合軍を破った後には、この町を植民都市とした。マケドニアが 4 つの行政区に分けられたとき、フィリピはその第一地区の重要都市とされて (使 16 : 12 参照)、イタリア本土都市と同等のイタリア権を有することになり、フィリピ市民の多くには、「ローマ市民権」が付与された (使 16 : 21 参照)。

このフィリピにも、ユダヤ人の共同体は存在したようであるが、会堂 (シナゴグ) はなく、町から離れた川岸にある「祈りの場所」を持つだけだったようである (使 16 : 13)。

パウロがこのフィリピの町を訪れたのは、彼のいわゆる第二回伝道旅行 (使 15 : 36 - 18 : 22) においてである。彼がヨーロッパの地に足を踏み入れたとき、最初に訪れたのが、このフィリピであった。彼は、トロアスから船出してサモトラケ島に直行し、翌日ネアポリスの港に着き、そこからフィリピに入った (使 16 : 11 - 12)。その滞在は、「数日間」 (使 16 : 12) であったと言われるが、当地には集会所が誕生し、小アジアのテュアティラ市出身で紫布を扱う女商人リュディアの一家が入信したとされる (使 16 : 14 - 15)。彼女の家は、フィ

リピ伝道の拠点とされた (使 16 : 15, 40)。

それと同時にパウロは、この地において「苦しめられ、侮辱された」とも語る (I テサ 2 : 2)。これは、当地の高官が彼を逮捕して鞭打ち、投獄した事件だとされる (使 16 : 16)。一行はその後、釈放されて町から追放されたものと推測されるが、『使徒行伝』16 章 25 節以下では、これを大地震とそれに伴う奇跡によって説明している。

パウロはその後、彼のいわゆる第三回伝道旅行 (使 18 : 23 - 21 : 16) の途上にて、フィリピを再び訪れている (使 20 : 6 参照)。

2. 『フィリピ書』の概要

『フィリピ書』がパウロ自身の手によるものであることを疑う学者は、今日ほぼいない⁴。パウロがこの書簡を書き送ったのは、彼が囚われの身であったときとされていることから (フィリ 1 : 7.13.16 - 17 参照)、本書簡は、『フィレモン書』 (や『コロサイ書』、『エフェソ書』) と共に、いわゆる「獄中書簡」 (Gefangenschaftsbriefe) と呼ばれている⁵。但し、そこで前提とされている監禁は、彼のあらゆる伝道活動を妨げるものではなかったようである (フィリ 1 : 7.12 以下参照)。フィリピの町からは、エパフロデイトを通じて贈物を受け取っており (フィリ 4 : 18, なお 2 : 25 も参照)、彼を (手紙と共に) 送り返し、フィリピの信徒たちに感謝を示そうとしている (フィリ 2 : 25.28)。また、フィリピの共同体の様子を見るため、パウロの同行者であるテモテを派遣するとも告げている (フィリ 2 : 19 - 23)。パウロ自身もフィリピの共同体を訪問したいと思っているもの (フィリ 1 : 26, 2 : 24)、彼の判決はまだ出ておらず (2 : 23)、釈放か死刑か分からない板挟みの状態に置かれている様子が窺い知れる (フィリ 1 : 19 - 25)。

本書簡が執筆された場所と時期をめぐっては諸説ある。執筆場所の候補として挙げられ

るのが、ローマ⁶、(海辺の)カイサリア⁷、そしてエフェソ⁸である。執筆場所と時期は密接に関連している。『使徒行伝』において、パウロが拘留されたことを伝えている町は、フィリピを別にすると、カイサリアとローマである。カイサリアでの拘留は、彼のいわゆる第三回伝道旅行後にエルサレムに戻った際、騒乱を起こしたとしてローマ当局に逮捕・移送され、未決囚として過ごしたもので(使21:27-24:27)、56-58年頃のこととされている。カイサリアが執筆場所であれば、この時期に年代付けられる。ローマ市民でもあったパウロはその後、皇帝の裁判を受けるためにローマに護送される(使27:1-28:16)。ローマ到着は60年頃であることから、ローマを執筆場所と考えるならば、執筆時期は60年以降とされる。エフェソ説に与する人々は、『Ⅱコリント書』11章23-29節にあるパウロの労苦のリストを参考にして(なお、Ⅱコリ6:5、Ⅰクレ5:6も参照)、『使徒行伝』には記載がないエフェソでの拘留を推定する。パウロは第三回伝道旅行の途上、エフェソに滞在していたとされており(使19:10)、この53-55年頃に、パウロ拘留と『フィリピ書』執筆が行われたと考える。しかしながら、どの候補も決定的な論拠を欠いており、本書簡執筆の場所と時期は、はっきりとは定められないのが実情である。

1:1-2	差出人 — 宛先 — 挨拶	序
1:3-11	感謝・祈り	
1:12-26	近況報告	本体
1:27-2:18	福音に相応しい生活	
2:19-24	テモテの派遣	
2:25-30	エパフロデイトの送還	
3:1-21	キリストを目指す生活	
4:1-9	勧告	
4:10-20	贈物への感謝	
4:21-22	最後の挨拶	結び
4:23	締め括り定式	

図表1 フィリピ書の構成

全4章、合計104節からなる『フィリピ書』は、全体として、1章1-11節の「序」と4章21-23節の「結び」によって、大きく枠付けられている(図表1参照)⁹。「序」の部分にあるのは、1-2節にある「パウロとテモテ」¹⁰という差出人(*superscriptio*)、「フィリピにいる、キリスト・イエスにおけるすべての聖なる者たちに」、「監督たちに」(*ἐπισκόποις*)¹¹、「執事たちに」(*διακόνους*)¹²という宛先(*adscriptio*)、そして「あなたたちに恵みと平和があるように」との挨拶(*salutatio*)¹³である。そして、それに続く3-11節には、フィリピの共同体に対する感謝と祈りの言葉が置かれている。

一方の4章21-23節の「結び」部分は、「キリスト・イエスにおけるすべての聖なる者たち」への最後の挨拶(4:21-22)¹⁴、そして「イエス・キリストの恵みが、あなたたちと共に」と祈願する締め括り定式からなる(4:23)¹⁵。

この「序」と「結び」の枠構造に挟まれた手紙の「本体」部分(1:12-4:20)は、獄中にあるパウロの近況の報告(1:12-26)から始まる。この後にあるのは、キリストの福音に相応しい生活として、「反対者たち」に惑わされず、キリストを模範とした、謙虚で従順であることの勧めである(1:27-2:18)。続いて、パウロの同行者であったテモテをフィリピへと派遣すること、自らもそちらに行くことの希望(2:19-24)、そしてフィリピからパウロのもとに派遣されていたエパフロデイトを送還することの約束(2:25-30)が語られる。3章1-21節においてパウロが述べるのは、自分の過去と現在を引き合いに出しつつ、「肉を頼りとする」敵対者たちへの警戒と、キリストを目指した生活の勧告である。4章に入ると、常に「喜び」をもって祈り、すべて正しいことを行うよう促す勧告(4:1-9)の後、フィリピからパウロに届けられた贈物に対する感謝の言葉が置かれている(4:10-20)。

なお、この『フィリピ書』は、その内容の「急激な変化」を主たる根拠として、3つの手紙(手紙A・1:1-30, 2:1-30, 3:1, 手紙B・3:2-21, 4:1, 手紙C・4:2-23)の集合体であるとししばしば主張される¹⁶。この仮説が正しいとすれば、本稿の考察の主たる対象である3章12-16節の段落は、論敵たちに対する反駁を記したとされる手紙Bの文脈に位置付けられることになる。しかしながら、そもそもこのような仮説が的を射たものであるかどうか、十分な注意と検証を必要とする¹⁷。それと同時に、この分割説を採る際には、現在のわれわれが手にする『フィリピ書』の形態が、いつ、誰によって、何のために作り上げられたのかという問題にも答える必要があるだろう。

3. テクスト—翻訳と訳注

『フィリピ書』3章13-14節の問題についての詳しい分析のために、まずはこれらの節を含む同書3章12-16節のギリシア語テキストの日本語訳を示す。テキストの底本には、ネストレーア—ラント校訂本28版を用いる¹⁸。本文批評上の問題や文法的、語彙的な説明については、その都度、訳注にて論じる。

翻訳

¹²私が既に得た^{a)}、あるいは既に完全にされたということではなく、むしろ私は、獲得^{b)}できるかどうか^{c)}、駆けている^{d)}。なぜなら^{e)}私は、キリスト[・イエス]^{f)}によって獲得されたからである。¹³兄弟たちよ、私は獲得したとは、私自身思っていない^{g)}。むしろ一つのこと、すなわち私は、後ろのものを忘れ、前のものに身を伸ばし^{h)}、¹⁴目標に向かって駆けている。キリスト・イエスにおける神の、上への召しの賞へと。¹⁵それゆえⁱ⁾、すべての^{j)}完全な者たちであるわれわれは、このこ

とを考えよう。そしてもし、あなたたちが何か別のことを考えているのなら、このことを、神はあなたたちに啓示する。¹⁶いずれにせよ、われわれが到達したところ、それに並ぶべきである^{k)}。

訳注

- a) P⁴⁶ならびにD*, Ir^{lat}, Ambstなどでは、この後に ἢ ἥδη δεδικαίωμαι「あるいは既に義とされた」という文言が置かれている(ℵ, A, Bなどの写本にはなし)。これは、後代の写本家による補足的な強調のための付加である可能性が高い¹⁹。「義とされる」という表現は、ロマ6:7, I コリ4:4参照。
- b) 動詞 καταλαμβάνω「捕らえる、獲得する」(λαμβάνωの強調語)は、12b.13節にも繰り返される、本章句の鍵語の一つ。ロマ9:30, I コリ9:24参照(またI テモ6:12も)²⁰。前出のλαμβάνω「得る」と並んで、この動詞も目的語を欠いており、何を得ないし獲得するのかが明言されていない。「キリスト」(8.10節)²¹、「復活」(10.11節)²²、「賞」(14節)²³などが想定される。
- c) P^{46.61vid}, ℵ², A, B, D², K, L, Pなどの写本ではεἰ καὶとなっているが、ℵ*, D*, F, Gなどではκαὶを欠く(フィリ3:11参照)。εἰは不確定の期待を表す²⁴。
- d) 動詞 διώκω「駆ける」は、14節にも出る、本章句の鍵語の一つ。14節では明らかに徒競走のモチーフを背景とする。新共同訳は「努めている」、口語訳、岩波訳、田川訳は「追い求めている」。
- e) ἐφ' ᾧは、ἐπὶ τούτῳ ὅτιの省略形で、理由を表す²⁵。
- f) 「イエス」の語は、P⁴⁶, ℵ, Aなどの写本には見られるものの、B, D, F, Gなどではこれを欠いており、元来のテキストに遡らせるべきか判断が難しい。
- g) οὐ「～ない」は、P⁴⁶, B, D², F, G, K, Lなどの支持する読み。ℵ, A, D*, Pなどの写本では、οὐの代わりにοὐπω「まだ～ない」が置かれる。本文批評上は、「より難しい読み」(lectio difficilior)の原則から、οὐが採用される²⁶。
- h) 動詞 ἐπεκτείνω「伸ばす」は、新約中、本箇所のみ見られ、中動相で用いられている²⁷。口

<p>12 Οὐχ ὅτι ἤδη ἔλαβον ἢ ἤδη <u>τετελείωμαι</u>, διώκω δὲ εἰ καὶ καταλάβω, ἐφ' ᾧ καὶ κατελήμθην ὑπὸ <u>Χριστοῦ [Ἰησοῦ]</u>.</p> <p>13 ἀδελφοί, ἐγὼ ἑμαυτὸν οὐ λογίζομαι <u>κατελιηθέναι</u>. ἐν δέ, τὰ μὲν ὀπίσω ἐπιλαιθανόμενος τοῖς δὲ ἔμπροσθεν ἐπεκτεινόμενος, 14 κατὰ σκοπὸν <u>διώκω</u> εἰς τὸ βραβεῖον τῆς ἄνω κλήσεως τοῦ θεοῦ ἐν <u>Χριστῷ Ἰησοῦ</u>.</p> <p>15 Ὅσοι οὖν <u>τέλειοι</u>, <u>τοῦτο</u> <u>φρονῶμεν</u>. καὶ εἴ τι ἐτέρως <u>φρονεῖτε</u>, καὶ <u>τοῦτο</u> ὁ θεὸς ὑμῖν ἀποκαλύψει. 16 πλὴν εἰς ὃ ἐφθάσαμεν, τῷ αὐτῷ στοιχεῖν.</p>	<p>12 節 獲得に向けた疾走 未取得・不完全の強調 獲得を目指して駆ける <u>キリスト</u>による獲得</p> <p>13-14 節 目標・賞に向けた疾走 未獲得の強調 「目標」に向けて駆ける 「賞」(<u>キリスト</u>)における召しの</p> <p>15-16 節 勸告 <u>完全な者たち</u>, 「このこと」を考える 「このこと」の神啓示 到達したところに留まる</p>
---	---

図表2 フィリ3：12-16の構成

語訳は「からだを伸ばす」、新共同訳は「全身を向ける」、岩波訳、田川訳は「身を伸ばす」。

1) 接続詞 οὖν「それゆえ」は、書簡において、教義的な説明の後、それを受けて勸告を始める際にしばしば用いられる表現とされる²⁸。ロマ6：12、13：12、1テサ5：6、コリ3：5.12、ヤコ4：7、1ペト2：1などを参照。

2) ὅσοι (ὅσοςの男性複数形)の語は、空間や時間、量や数の多さを表す。πάντεςを伴って、「すべての」を表すが(ルカ4：40、ヨハ10：8、使3：24、5：36-37など)、πάντεςを伴わない場合でも同様の意味合いを持つことがある(ロマ2：12、6：3、8：14、ガラ6：12.16など)²⁹。フィリ4：8に多用される。

3) 動詞 στοιχεῖωの基本的な意味は、「同じ列に並ぶ」。使21：24、ロマ4：12、ガラ5：25、6：16参照。なお、τῷ αὐτῷ στοιχεῖν κανονι το αυτο φρονειν (N², K, L, P), το αυτο φρονειν (+και 629) τω αυτω (αυτοι D*) κανονι (-D*) στοιχειν (+κανονι D³) (D), το αυτο φρονειν τω αυτω συνστοιχειν (F, G) などのさまざまな異読がある。本文批評上は、P^{16.46}, N^{*}, A, B, I^{vid}などの重要な写本や、「より短い読み」(lectio brevior)の原則に則り、τῷ αὐτῷ στοιχεῖνが採用される³⁰。

4. 文脈と構成

『フィリピ書』の手紙本体部分の中で、3章12-16節の段落は、パウロがフィリピの人々に対して、「肉を頼りとする者たち」に対して警戒するよう説くための勸告を述べる文脈に位置する。パウロは、彼自身のファリサイ派としての誇りについて語った後(3：1-6)、キリストを知ることと比したときのそれらの無為さ、キリストとその復活の力にあやかって死者の中から復活することの希望を記す(3：7-11)。本段落はこれらの言葉を引き継いでおり、構成上、12節の「獲得に向けた疾走」、13-14節の「目標・賞に向けた疾走」、そして15-16節の「勸告」の3つに大きく分かれる(図表2参照)。

パウロは段落冒頭、οὐχ ὅτι「～ということではない」という表現を用いて、自分の達成を否定することから始める(12節a)。ἤδη「既に」+動詞(アオリストならびに受動完了)という表現が2つ並べられて、彼は「得た」(ἔλαβον)のでも「完全にされた」(τετελείωμαι)

のでもないというのである。それと同時に、λαμβάνωの強調語であるκαταλαμβάνωを2度繰り返し、彼が「獲得できるよう」「駆けている」(διώκω)こと、また既にキリスト・イエスによって「獲得された」と説く(12節b)。キリストによって獲得されたという言葉の念頭には、彼自身が体験したとされるダマスコ近郊でのいわゆる「回心」の出来事が置かれていよう(使9章, 22章, 26章, なおIコリ15:8-10, ガラ1:15-16も参照)³¹。

「兄弟たちよ」(ἀδελφοί, 『フィリピ書』における用例は他に, 1:12, 3:1.17, 4:1.8)という呼びかけ³²で始まる13-14節は, この「獲得すること」(καταλαμβάνω)を目指して「駆ける」(διώκω)というモチーフを更に展開する。そこでもまず, 彼は自分自身が既に「獲得した」という考えを否定することから始める(13節a)。その際, 人称代名詞ἐγώ「私」を記すことで主語を強調しつつ, 彼自身の主張を示している。続く13節bでは, 目下のパウロの状態を描き出すために, 「後ろのものを忘れ, 前のものに身を伸ばす」という表現が見られる。14節aでは, この状態が「目標」(σκοπός)³³を目指して「駆ける」(διώκω)ことであると説明される。この「目標」は, 続く14節bにおいて, 「賞」(βραβείον)という語によって言い換えられ, それは「キリスト・イエスにおける, 神の, 上への召し」であるとの説明が加えられる。

15-16節は, 接続詞οὖν「それゆえ」によって導入され, これまでの説明を踏まえた上での勧告である。そこでは, 再び「完全」のモチーフが現れ, パウロを含めた「われわれ」を「完全な者たち」(τέλειοι)と見なしている。そして動詞φρονέω「考える」と指示代名詞τοῦτο「このこと」をそれぞれ2度繰り返しつつ, 「このこと」を「考える」べきであること, そしてもし別のことを「考えている」ならば, 「このこと」は神によって啓示されるというのである。16節では最後に, 各々が

到達したところに留まるよう促されて, 本段落は締め括られている。

『フィリピ書』3章12-16節に見て取ることが出来る構成上の特徴として, 12節と13-14節の両段落はいずれも, まずは否定辞οὐχ(12節a)ないしοὐ(13節a)と共に, ある行為を否定することから始まり, 助詞δέ「むしろ」(12節b, 13節b)により, それに代わる行為が導かれている。更に, 12節において提示された話題が, 13-14節で更に展開される際, 12節に出るδιώκω「駆ける」, καταλαμβάνω「獲得する」といった鍵語が, 13-14節にも取り入れられている。加えて目を引くことに, 12節の最後と13-14節の最後には, いずれも「キリスト・イエス」という語句が置かれている。すなわち, 12節と13-14節は, 内容的にも, また構文上も並行するよう形作られているのである。

5. 競技の比喩

パウロは『フィリピ書』3章12-14節において, まだ自分自身が「得る」(λαμβάνω, 12節a)ないし「獲得する」(καταλαμβάνω, 13節a)ことはできていないものの, 「獲得する」ために, 目標に向かって「駆けている」(διώκω)と語る(12b.13b-14節, なおロマ9:30も参照)。14節では, それが「賞」(βραβείον)のためであると言われる。ここには, 競技の比喩という形式が採られているという特徴を見て取ることが出来る³⁴。すなわちパウロは自分の行動とその目的について述べる際に, 古代の競技会, とりわけ徒競走とそれに関連する事柄ならびに表象を指す語彙を用いているのである。

このようにパウロが自らの手紙の中で, 自分の主張を競技の比喩を通じて語る場面は, 本箇所以外にも確認される。その典型として挙げられるのが, 『Iコリント書』9章24-26節である。

²⁴あなたたちは知らないのか、競技場で走る者たちは皆走るが、賞を得るのは一人である。それゆえ、あなたたちは獲得するために走れ。²⁵競技をする者は皆、すべてに節制する。彼らは朽ちる冠を得るためにそうする。しかし、われわれは朽ちないもののためである。²⁶だから、私としては、やみくもに走らないし、空を打つような拳闘もしない。

ここには、『フィリピ書』3章と共通する λαμβάνω「得る」(24節), καταλαμβάνω「獲得する」(24節), βραβεῖον「賞」(24節)に加えて, ἀγωνίζομαι「競技する」(25節, なおコロ1:29, 4:12参照)やτρέχω「走る」(24.26節, なおロマ9:16, ガラ2:2, 5:7, フィリ2:16, IIテサ3:1参照)といった競技に関する語, στέφανος「冠」(25節, なおフィリ4:1, Iテサ2:19参照)という褒賞に関わる語, 更には, στάδιον「競技場」(24節)という施設に関わる語も見られ, 述べられている事柄が競技の比喩であることがよりはっきりと見て取れる。また26節には, 徒競走と並んで, πυκτεύω「拳闘する」やδέρω「打つ」といった語彙と共に, 拳闘(ボクシング)の競技の比喩も用いられていることが分かる。

これらの叙述から窺い知れるのは, パウロが古代の競技会の実情や各競技の特性に通じており, 自分の主張を読み手に伝えようとする際, それらを比喩として積極的に用いているということである。

ギリシア古典期以来, 全ギリシア世界から参加者が集って競技会が開催された聖地としては, オリンピア, デルフォイ, ネメア, イストミアがあった³⁵。これらの地で開催されたオリンピック祭, ピュティア祭, ネメア祭, イストミア祭は, 古代の地中海世界における四大競技会としてその名をよく知られており, 前者2つは4年に1回, 後者2つは2年に1回開かれていた。これらはいずれも単

なるスポーツの祭典ではなく, その地の守護神に競技が捧げられる宗教儀礼の行事として位置付けられていた。

古代ギリシア以来のこれら競技会の背後には, 競技(アゴン)主義と呼ばれる思想が横たわる。選手たちは観衆の面前で, 勝ち負け・優劣をめぐって互いに競い合い, 勝者と敗者が明らかにされ, 勝者にのみ「賞」(βραβεῖον)が与えられるのである。パウロも述べるように, 勝者には, 当地の植物で作られた「冠」(στέφανος)が, 象徴としてその頭上に飾られた。勝者は, 故国の名声を高める英雄であり, この象徴的な「冠」に加えて, 金銭的報酬や免税特権, 年金付与などの有形無形の特典が彼を待っていた。競技会で優勝すること, それはその選手が, 神々に祝福された特別な存在であると見なされたことを示している。実力者が常に勝利者であるとは限らない勝負事全般の不確実性に鑑みて, 勝ち抜いて勝利を手中に収めることは, その者が神々の恩寵を得ていることの証でもあった³⁶。

ローマ帝政時代, いわゆる「ローマの平和」の幕開けにより, 歴代の皇帝たちは, ギリシア人の由緒ある祭典を振興し, 競技施設の増補や新築も行なわれた。選手や観客は地中海世界全体から集まり, 2世紀半ば頃には, その人気は絶頂を迎えたとされる。ローマ帝国内では, 数多くの運動競技大会が開催されたことが知られており, フェニキアのシドン, パレスチナのガザで開催された競技会などは, 「オリンピックに並ぶ」という表現で形容された。元首政の成立以後, 小アジアのトラレスやタルソスなどには, 「オリンピック」を名乗る競技会も存在したとされる³⁷。

ディアスポラのユダヤ人としてタルソスで出生したパウロが, その成長の過程で, あるいは伝道旅行に赴いた先々で, これらの競技会についての知識を得ていたことは想像に難くない。また競技会の見物客の多くは, 競技施設のある周辺にテントを張って野宿した。

テント造りを生業としていたパウロにとって(使18:3参照), 競技会は重要な商売の場でもあった³⁸。とりわけ彼に直接的な影響を与えた競技会としてしばしば指摘されるのが、イストミア祭である³⁹。開催地のコリント海峡の古代名イストモスにその名が因むこの祭典は、ポセイドンを祭神として2年に1回、春に開催されており、紀元後49年、51年、53年が開催年とされる⁴⁰。パウロは第二回伝道旅行の途上、紀元後51年前後の1年半ほど、コリントに滞在していた(使18:11参照)。すなわち、これらの年に行なわれたイストミア競技会のいずれかについて、当地にて実際に競技を見聞した可能性が十分に考えられる⁴¹。

6. 「後」と「前」

以上のような前提を踏まえて、『フィリピ書』3章13節bの表現が意味することについて考えてみよう。この部分は、構文的に見て、前半と後半が並行するように組み立てられている。

τὰ	μὲν	ὀπίσω	ἐπιλανθανόμενος
τοῖς	δὲ	ἔμπροσθεν	ἐπεκτεινόμενος,

用いられている2つの動詞ἐπιλανθανόμενος「忘れる」とἐπεκτεινόμενος「身を伸ばす」は、いずれも中動態現在分詞形で、これらによってパウロ自身による目下の能動的な振舞いが説明されている⁴²。動詞の目的語ないし補語になっているのが、「後ろのもの」(τὰ ὀπίσω)と「前のもの」(οἱ ἔμπροσθεν)という表現である。いずれも冠詞(複数形)に副詞(ὀπίσωならびにἔμπροσθεν)が組み合わされた名詞句になっている。

ὀπίσωの用例は新約中、全35を数え⁴³、用例の多くは、福音書に集中する(26回)⁴⁴。



図表3 壺に描かれた走者たち

この語が言い表すのは、主として空間的な意味での「後ろ」であり、イエスの後ろに「従う」(マタ10:38, マコ8:34//マタ16:24//ルカ9:23), 「ついて来る」(マコ1:17//マタ4:19, マコ1:20, ルカ14:27)など、イエスへの信従を表す動詞を伴う場合が多い。時間的な意味での「後」を表す例としては、洗礼者ヨハネの「後に」イエスが「やって来る」(マコ1:7//マタ3:11, ヨハ1:15.27.30)。この場合の「後」とは、出来事が生起する将来のある地点を表している。

もう一方のἔμπροσθενは、新約中に48の用例が見られるが⁴⁵、こちらも用例の多くが表すのは、空間的な意味としての「前」である⁴⁶。この語を時間的な意味で用いているのはヨハネであり(ヨハ1:15.30, 3:28), そこではὀπίσω「後」の対極語として位置付けられている。

ギリシア語の前置詞ὀπίσω「後」とἔμπροσθεν「前」は、すなわち、いずれも空間的および

時間的な意味を表し得るが、時間的な意味で用いられる際には、日本語その他の一般的な言語慣用と同じく、「後」は時間的に未来、「前」は過去のことを指す。これらのごとに鑑みるに、『フィリピ書』3章13節に出るὀπίσωとἔμπροσθενが表しているのは、字義的には時間的な意味ではなく、空間的な意味の「後ろ」ないし「前」であると考えられる。

では、空間的な意味の「後ろのもの」や「前のもの」とは何か。ここで想起すべきは、本箇所が徒競走の比喩の一部分を形成しているということである。徒競走は古代の競技会の中でも、最も古くから続いてきた伝統競技であったとされ、中でも競技場の端から端までの直線1スタディオン（約200m、マタ14：24など参照）を走るスプリント競技であるスタディオン走が基本であった。トラックとそれを囲む観客席を含む競技施設もスタディオンと呼ばれた（Iコリ9：24参照）⁴⁷。

古代ギリシアのアンフォラの壺絵の中には、このスタディオン走の走者たちが駆けている様子を描いたとされるものが数多く残されている。それらを見ると、走者は、足は大腿部を大きく引き上げ、腕は肘から先を指先まで伸ばしたまま前後に大きく振り上げ、前傾姿勢になって疾走していた様子が窺い知れる（図表3上参照）。「前のものに身を伸ばす」という表現には、ゴールを目指して駆ける競技者が取ったこの前傾姿勢が念頭に置かれていよう⁴⁸。

それと対比される「後ろのものを忘れる」というモチーフによって言い表されていることは何であろうか。ある壺の表面には、先頭を行く1人の走者が、彼の後ろに追い迫る2人の走者を気にして、まだ競技中に後ろを振り向いている場面が描かれているものがある（図表3下参照）。彼を追いかけている競走者たちを見て、彼は明らかに追い越されることを恐れている。後続との距離が気になって後ろを向いた走者は、前傾姿勢が崩れて直立と

なり、自らペースを乱して減速してしまう⁴⁹。後ろを振り向いてしまうと、獲得できたはずのものを逸してしまう大きな危険があるにもかかわらず、人は後ろの様子が気になって振り返ってしまう。この壺絵に描かれた一場面には、そんな人間の習性と、それが持つ危険性が暗示されていよう。

ある人が、後ろを振り返ってしまったがゆえに、それまでの努力を台無しにしてしまう結果を被る場面として特に印象的なのが、創世記19章26節である。それは、ソドムの町を脱出するロト家族の道すがらについて語る場面である。

彼（＝ロト）の妻は後ろに（εις τὰ ὀπίσω）振り向いたので、彼女は塩の柱になった。

ロトと彼の妻、そして彼の2人の娘たちは、ソドムの町から逃れるよう神ヤハウエから指示される。その際、「後ろに振り向いてはいけない」と命じられていた（創19：17）。この禁を犯してしまったロトの妻を待っていたのは、塩の柱になるという滅びであった。この描写は、『フィリピ書』3章13節が比喩の中で、パウロが「忘れる」と述べている行為と逆の形で響き合う。『フィリピ書』3章13節で「後ろのもの」に象徴されるのは、それに固執することが招来する結末が破滅であることが明白であるにもかかわらず、これに注意を向けるよう、常に人を誘惑する代物である。

賞の獲得を目指す走者は、自分の後ろに追い迫る競走者たちに注意を向けることはない。目標は常に前方に固定され、前傾姿勢になって駆ける。「後ろの者を忘れること」と「前のものに身を伸ばすこと」は、徒競走で勝利することを求めるこの走者の表象を背景として理解される。

おわりに

パウロは、『フィリピ書』3章13-14節において、自らの目下の振舞いを説明するために、古代の競技会、特にスタディオンの情景を比喻として積極的に用いている。そこでは、賞を獲得するために、競争相手を気にして後ろを振り向くことなく、ゴールを目指して前傾姿勢を保つ走者の様子が念頭に置かれている。但し、競技(アゴン)主義に基づくこの徒競走においては、必然的に一人の勝者とその他の敗者たちが生み出される。パウロ自らが勝者になるということは、それと同時に、彼以外のすべてが敗者となることを意味した。競技主義が本来的に抱えるこの問題は、ここでのパウロの視野には入っていない。

出典

図表 1, 2 : 筆者作成

図表 3 : N. Yalouris et al., *The Olympic Games in Ancient Greece: Ancient Olympia and the Olympic Games*, Athens 2003, No. 70, 71.

注

- ¹ これは日本語以外にも見て取れる現象である。例えば、英語の before - after, ドイツ語の vor - nach など。
- ² 本稿における聖書諸文書の名称ならびに略号は、岩波訳(新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店、2004年、XI頁)の方式に従う。
- ³ フィリピの町の概要については、J. Becker / H. Conzelmann / G. Friedrich, *Die Briefe an die Galater, Epheser, Philipper, Kolosser, Thessalonicher und Philemon* (NTD 8), Göttingen 1981, 125ff (Friedrich); 山内真『ピリピ人への手紙』日本基督教団出版局、1987年、13頁以下; F. W. Beare + 秀村欣二「ピリピ」、『旧約新約聖書大事典』教文館、1989年、998頁以下; P. Pilhofer, *Philippi, Bd I. Die erste christliche Gemeinde Europas* (WUNT 87), Tübingen 1995; 佐藤研『旅のパウロ—その経験と運命』岩波書店、2012年、135頁以下; D. Häußer, *Der Brief des Paulus an die Philipper* (HTA), Witten

2016, 7ff など参照。

- ⁴ U. Schnelle, *Einleitung in das Neue Testament*, Göttingen 2013⁸, 153 など参照。
- ⁵ Friedrich, NTD 8, 128ff など参照。
- ⁶ M. Bockmuehl, *The Epistle to the Philippians* (BNTC 11), London 1998; F. F. Bruce, *Philippians* (NIBC 11), Peabody 1989; C. H. Dodd, *New Testament Studies*, Manchester 1954², 83ff; G. D. Fee, *Paul's Letter to the Philippians* (NICNT), Grand Rapids 1995; P. T. O'Brien, *The Epistle to the Philippians. A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Grand Rapids 1991; Schnelle, *Einleitung*, 163; 田川建三『新約聖書訳と註4 パウロ書簡その二／擬似パウロ書簡』作品社、2009年、787頁以下など。
- ⁷ E. Lohmeyer, *Die Briefe an die Philipper, an die Kolosser und an Philemon* (KEK 9), Göttingen 1964¹³, 3f; G. F. Hawthorne, *Philippians* (WBC 43), Waco 1983, 42ff; J. A. T. Robinson, *Wann entstand das Neue Testament?*, Paderborn/Wuppertal 1986, 69; R. Fuchs, *Der Ort des Epheserbriefes in der paulinischen Chronologie und Theologie*, *JETH* 28 (2014), 85 など
- ⁸ 青野太潮『パウロ—十字架の使徒』岩波新書、2016年、89頁以下; I. Broer, *Einleitung in das Neue Testament*, Würzburg 2010³, 360ff; Häußer, HTA, 29; H. Koester, *Paul and His World. Interpreting the New Testament in Its Context*, Minneapolis 2007, 72; U. B. Müller, *Der Christushymnus Phil 2,6-11*, *ZNW* 79 (1988), 17ff; H. Omerzu, *Der Prozeß des Paulus. Eine exegetische und rechtshistorische Untersuchung der Apostelgeschichte* (BZNW 115), Berlin/New York 2002, 326ff; P. Pokorný / U. Heckel, *Einleitung in das Neue Testament. Seine Literatur und Theologie im Überblick*, Tübingen 2007, 287f; 佐藤『パウロ』, 185頁以下; W. Schenk, *Die Philipperbriefe des Paulus. Kommentar*, Stuttgart 1984, 338; 山内『ピリピ』19頁以下など。
- ⁹ フィリピ書の構成については、Friedrich, NTD 8, 126ff; R. Knippenberg + 佐竹明「ピリピ人への手紙」、『旧約新約聖書大事典』教文館、1989年、999f; P. Pilhofer, *Das Neue Testament und seine Welt. Eine Einführung*, Tübingen 2010, 184; Schnelle, *Einleitung*, 164f; Häußer, HTA, 38ff など参照。

- ¹⁰ パウロと並んでテモテが挙げられるのは、他にⅡコリ1:1, コロ1:1, Iテサ1:1, Ⅱテサ1:1, フィレ1。
- ¹¹ 「監督」は、パウロによる手紙の中で、本箇所のみに見られる語。新約中の用例は、使20:28, Iテモ3:2, テト1:7, Iペト2:25。G. Friedrich + 青野太潮「監督」, 『旧約新約聖書大事典』教文館, 1989年, 544f頁; R. Schnackenburg, Art., Bischof (Episkopos), in: *NBL* 1 (1991), 301f 参照。
- ¹² 「執事」を確立した役職として用いているのは、Iテモ3:8。J. Müller-Bardorf + 佐竹明「執事」, 『旧約新約聖書大事典』教文館, 1989年, 552頁; H. Frankemölle, Art., Diakon, in: *NBL* 1 (1991), 418f 参照。
- ¹³ 同じ挨拶文が見られるのは、ロマ1:7, Iコリ1:3, Ⅱコリ1:2, ガラ1:3, Ⅱテサ1:2, フィレ3, 短縮されてコロ1:2, Iテサ1:1。
- ¹⁴ フィリ4:23における *οἱ ἐκ τῆς Καίσαρος οἰκίας* 「カエサルの子の者たち」という表現について、Philhofer, *Neue Testament*, 182ff; Häußer, HTA, 334 参照。
- ¹⁵ この締め括り定式は、パウロの手紙（ロマ16:20, Iコリ16:23, Ⅱコリ13:13, ガラ6:18, Iテサ5:28, フィレ25）, ないしパウロの名による手紙（コロ4:18, エフェ6:24, Ⅱテサ3:18, Iテモ6:21, Ⅱテモ4:22, テト3:15）に見られる。
- ¹⁶ 青野「パウロ」88頁以下; 佐藤「パウロ」186頁; 山内『ピリピ』15頁以下; Häußer, HTA, 31ff など参照。
- ¹⁷ 分割説に対する反論としては、例えば、Pokorný/Heckel, *Einleitung*, 275f; Schnelle, *Einleitung*, 165ff; 田川『新約4』405頁以下など参照。
- ¹⁸ Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Stuttgart 2012²⁸。
- ¹⁹ M. Dibelius, *An die Thessalonicher I, II, an die Philipper* (HNT 11), Tübingen 1937, 91; 佐竹明『現代新約注解全書 ピリピ人への手紙』新教出版社, 1969年, 219頁; J. Gnilka, *Der Philipperbrief* (HThK.NT), Freiburg u.a. 1980, 198; Friedrich, NTD 8, 163; O'Brien, NIGTC, 337; Häußer, HTA, 247 など参照。
- ²⁰ Gnilka, HThK.NT, 198 参照。
- ²¹ Dibelius, HNT 11, 91; Häußer, HTA, 250f など参照。
- ²² W. Lütgert, *Die Vollkommen im Philipperbrief und die Enthusiasten in Thessalonich* (BFChTh 6), Gütersloh 1909, 10ff など参照。
- ²³ H. A. W. Meyer/A. H. Franke, *Kritisch exegetisches Handbuch über die Briefe Pauli an die Philipper, Kolosser und Philemon* (KEK 9), Göttingen 1886⁵, 190; F. W. Beare, *A Commentary on the Epistle to the Philippians* (BNTC 11), London 1959, 129 など参照。
- ²⁴ F. Blass/A. Debrunner/F. Rehkopf, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, Göttingen 1975¹⁸, § 375 参照。
- ²⁵ W. Bauer/K. Aland/B. Aland, *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, Berlin/New York 1988⁶, 582 参照。
- ²⁶ Häußer, HTA, 247 参照。
- ²⁷ Bauer/Aland, *Wörterbuch*, 577 参照。
- ²⁸ 佐竹『ピリピ』225頁参照。
- ²⁹ Bauer/Aland, *Wörterbuch*, 1186f 参照。
- ³⁰ Häußer, HTA, 248 参照。
- ³¹ Häußer, HTA, 253 参照。
- ³² 新約聖書ギリシア語では、多くの言語慣習と同じく、男女混合の集団を表す際、男性複数形の *ἀδελφοί* 「兄弟たち」が用いられる。Bauer/Aland, *Wörterbuch*, 28f 参照。
- ³³ σκοπός「目標」の語の用例は、新約中、本箇所のみ。なお、Iクレ19:2, Ⅱクレ19:1 参照。
- ³⁴ パウロの手紙に見られる競技の比喻については、P. Metzner, *Paulus und der Wettkampf. Die Rolle des Sports in Leben und Verkündigung des Apostels* (1Kor 9,24-7; Phil 3,12-16), *NTS* 46 (2000), 565ff; M. Brändl, *Der Agon bei Paulus. Herkunft und Profil paulinischer Agonmetaphorik* (WUNT II/222), Tübingen 2000 など参照。
- ³⁵ 古代ギリシアの競技会については、桜井万里子/橋場弦編『古代オリンピック』岩波新書, 2004年; 楠見千鶴子『ギリシアの古代オリンピック』講談社, 2004年など参照。
- ³⁶ Brändl, *Agon*, 32ff; 桜井/橋場『オリンピック』, 152頁以下参照。
- ³⁷ Metzner, *Wettkampf*, 566ff; Brändl, *Agon*, 140ff; 桜井/橋場『オリンピック』, 187頁以下参照。
- ³⁸ Metzner, *Wettkampf*, 573 参照。
- ³⁹ イストミア祭の概要については、K. Schneider, Art., Isthmia, in: *Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft* IX 2 (1916), 2248ff; Brändl, *Agon*, 222ff; 楠見『オリンピック

ク』, 85頁以下など参照。

⁴⁰ Schneider, *Isthmia*, *PRE* IX, 2249参照。

⁴¹ Metzner, *Wettkampf*, 572f参照。

⁴² Häußer, *HTA*, 254参照。

⁴³ ὀπίσωの語義については, H. Seesemann, *Art.*, ὀπίσω in: *ThWNT* V (1954), 289ff; G. Schneider, *Art.*, ὀπίσω in: *EWNT* II (1981), 1279f [堀田雄康/川島貞雄/大貫隆共編, 荒井猷/H. J. マルクス監修『ギリシア語 新約聖書釈義事典〈2〉』教文館, 1994年, 509頁以下] など参照。

⁴⁴ マタ6×, マコ6×, ルカ7×, ヨハ7×, 他は使5:37, 20:30, フィリ3:13, Iテモ5:15, IIペト2:10, ユダ7, 黙1:10, 12:15, 13:3。

⁴⁵ マタ18×, マコ2×, ルカ10×, ヨハ5×, 使2×, パウロ書簡7× (IIコリ5:10, ガラ2:14, フィリ3:13, Iテサ1:3, 2:19, 3:9.13), Iヨハ3:19, 黙4:6, 19:10, 22:8。

⁴⁶ ἔμπροσθενの語義については, A. Kretzer, *Art.*, ἔμπροσθεν in: *EWNT* I (1980), 1089f [堀田雄康/川島貞雄/大貫隆共編, 荒井猷/H. J. マルクス監修『ギリシア語 新約聖書釈義事典〈1〉』教文館, 1993年, 592頁以下] など参照。

⁴⁷ ちなみに, 徒競走には, 短距離走のスタディオン走の他, トラックを1往復する中距離走(ディアウロス), 12往復する長距離走(ドリコス), 重装歩兵の兜と脛当てを装着し, 丸盾を持って走る武装競走(ホプリトドロモス)があったとされる。競技会における徒競走については, 桜井/橋場『オリムピック』, 108頁以下; 橋場弦「古代オリムピク—ギリシア人の祝祭と身体」橋場弦/村田奈々子編『学問としてのオリムピック』山川出版社, 2016年, 28頁以下など参照。

⁴⁸ Metzner, *Wettkampf*, 577参照。

⁴⁹ Brändl, *Agon*, 299参照。